

---

# **オンラインゲーム『ジ・ユード・タカイ・オンライン』 隠れ鬼と袴の王様**

今ダ 果枯

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オンラインゲーム『ジ・コード・タカイ・オンライン』隠れ

鬼と袴の王様

### 【ISBN】

284822

### 【作者名】

今ダ 果枯

### 【あらすじ】

オンラインゲームをプレイしている少女のターニングポイントとなる一日。

私、中野 茜は、今日もオンラインゲーム『ジ・コード・タカイ・オンライン』にふけつていた。

『ジ・コード・タカイ・オンライン』は自由度の高いオンラインゲームである。

確か、元々は同人ゲームから始まつたとか何とかで。ファンタジー系のオンラインには珍しく、いや、まあ、今となってやあまり珍しくないことだが、ジョブと言つものがない。と言つより示した戦い方によつて周りから「格闘家っぽい」とか「魔法使い的」とか評価を下されたのがジョブになる訳で、ゲームシステムとしてはジョブと言うものは存在しない。

今の時代には、カプセル型体感ゲーム機『ココス COCO-S』と言つものがある。

私にも仕組みとかは、よくわからぬけど、ちょうど酸素カプセルのようなものの中にあるシートに腰を下ろし。眠るように意識を落とすと、仮想現実の世界で目を覚ます。

カジノがあつたり、ビジネス目的で使う人がいたりと割とゲーム以外の使用用途も多いみたいだ。

私は今日も『ジ・コード・タカイ・オンライン』の自由で料理研究家プレイを楽しんでいた。

「うわ、コツマ菜、減ってきたな。ついでにハヤウサギの肉も取りに行こうかな」

私は『二ンキ王国』の東の外れにある、森の中に一軒家を構えていた。

いやあ、偶然みつけた食の組み合わせが思つていて以上効果をおいしさで、それで相当儲かつた。初心者ではあり得ない程の大金

を得ることになったので。町の外れの森の中の家を買つた。流石に王国内の家を買つのは無理だったが、初心者にして拠点がある時点で結構すごい。

『』を持って家の周りをうろつく。

家の外はすぐにフィールドなので食料調達に困つた事は無い。

「見つけた！」

私は早速ハヤウサギを見つけた。

「よし」

距離もオーケーだ、『』を引く。もちろん毒は使わない、そんなもの使ってハヤウサギの肉が食べられないものになつては困る。パスッ。

「よしつ！」

私の放つた矢はハヤウサギの頭を射抜く。一撃。

「ふふふふ

流石、私。と言つたか『』の性能が良いだけだが。

今更だが、『ジ・コード・タカーリ・オンライン』はポイント振り分け制のゲームである。まあ、自由度の高さは、ここに関わってくる。

例えば魔法を使いたければ、『魔法』と言う項目にポイント割り振れば魔法が仕えるようになる。もちろん振り分けるポイント高ければ高いほど得られる効果も高くなる。

『魔法』のスキル以外にも、『剣術』や『会計』『採取』『料理』『裁縫』と種類は無数にあり、更に『魔法』と言うスキル項目の中にも『攻撃魔法』や、『炎魔法』と言つた具合に一部に特化したもの多く存在し、そういうスキルは通常のものより低いポイントで大きな効果を得ることが出来る。

そんな中から自分がプレイに必要だと思うものにポイントを割り振り自分でのプレイスタイルを極める。それがこのゲームの醍醐

味だと言つても過言ではない。

「さて、ハヤウサたん、どこだ、うへへへ」  
完全に女、棄てるけど、ここは森奥だし。どうせ誰も見てない  
し。

「ねえ！」

何！！ 私は振り返る。結構かつこいいプレイヤーが立っていた。  
「何でしようか？」

「僕の為にキミの持ち金全部置いていつて欲しいんだ」  
前言撤回、全然かつこよくない。くたばれイケメン。

「えーと、無理だとしたら？」

かつこ悪い男は片手間に頭をかき、魔方陣を展開しながらニヤニ  
ヤと嫌な笑いを作る。

「プレイヤーキラーですか、関心しませんね」  
プレイヤーキラー、他のプレイヤーを襲つてそいつがドロップす  
る持ち金やアイテムを奪うクズのこと、またその行為を言つ。

「説教なんて聞きたくないんですよ」

男は、強力な炎魔法を発動する。

「ばかっ！ こんなところで炎魔法なんて使つたら！」

山火事と言うか森火事？ が起こる。私の家が燃える。

そう思いつつも炎魔法の影に身を隠しながら距離を取る。

弓を引き頭を狙う。ヘッドショットは私の攻撃手段の中でも最も威  
力が高い。

「あはは、甘いっての」

「なつ！！」

男は自分の炎魔法を突つ切り私の首を押さえる。

「『耐火』のスキル！？」

「正解」

男はニヤニヤと笑い。よく知ってるねえとでも言いたげな顔だ。

私の友達に消防士プレイをしてた奴がいたから知つていた。

そんな中、男は強力な炎魔法を構える。  
死んだわ、私。

「いやー、プレイヤーキラーなんて関心しないですねえ」「誰だ！？」

「どこからとも無く森の中に声が響く。」

「後ろですよ」

男が後ろに振り返った瞬間。男は真横から殴り飛ばされた。「あはは、こんな古典的な手に引っかかっちゃダメですよお」どこからとも無くスーツを着た男、声の主が表れる。

「えっと、あなたは？」

「ああ、僕は『隠れ鬼』です」

「隠れ鬼？」

「えーと、れっきとしたプレイヤー名ですよ?」「す、すいません、私は『アカネ』つてています」

『隠れ鬼』さんは少し考える。

「ああ！ サワサワ蟹のソースとか、おじおじ牛のコトコト煮で有名な」

「あつ、はい」

「ちょっと照れるな。うん。」

「おい、『隠れ鬼』やつていいのか？」

気付くと目の前には上半身裸の、袴はがまを履いた男が立っていた。多分、プレイヤーキラー野郎を殴り飛ばした人だ。

「誰ですか？」

「『袴の王様』です」

「違う、『大木 真一』といつちゃんとしたコーナー名がある」

「『袴の王様』？」

なんだか思い当たる節があるような？

「俺を無視すんじゃねえよ」

いきなり痺れを切らしたようにプレイヤーキラー野郎が叫んだ。

「あれ、早速理知的な態度を取つていたメツキが剥がれましたか」

『隠れ鬼』さんは少し楽しそうな表情をする。

「えーと、あなたがユーチャー名『放火魔ん』さんですか」

なにそのダサいプレイヤー名。

「なんだよてめえら、俺のお楽しみの邪魔しやがつて  
やつちまうぜ！！『隠れ鬼』」

『袴の王様』が苛立たしげに怒鳴る。多分、元来乱暴な性格なのだろう。

「ええ、どうぞ」

!!。

その瞬間だつた。自分の存在が消えた。何を言つているのか、わからないとと思うが。私も何をされているのかいるのか、わからない。自分すら認識できない状態だった。

『ジ・コード・タカーアイ・オンライン』おいて他のゲームでは、あまり見ない一風変わつたシステムがある。

『由来システム』……だつたかな？ ゲームのプレイヤー名を決めたときにその名前に関係ボーナスとして最大2ポイント、その名前に由来するスキルにポイントが割り振られるシステムである。そのシステムを入れるとこのゲームで割り振れるポイントは最大1002ポイントになる。

『放火魔ん』おそらく、『炎魔法』なり、『耐火』なりのスキルにボーナスポイントが入つてるとと思う。『隠れ鬼』さんは、多分『隠密』とか。

「なつ！！」

『放火魔ん』は驚く。まあ私も驚いているのだから、あたりまえ

か。

「いや、あいつら気にしなくてもいいから、てめえは俺だけを見つけて、どうせ俺にやられるんだから」

『袴の王様』さんは、ゆっくりと構える。空手とかやつてるのかなあ。

「てめえ！」

「いいぜ、来いよ、一発、入れさしてやるから」

その言葉に切れた『放火魔ん』。巨大な火の玉を打ち出す。

「大丈夫なんですか！？」

私はそこにいるであろう『隠れ鬼』さんに叫びかける。

「えーと、大丈夫じゃないんですか？ 相手、もう負け犬オーラばんばん出しますけど？」

いや、そういうことじゃなくて！！

「心配性ですね、『アカネ』さん、彼はあれでも結構チートですよ

？ まあ一対一の正面戦闘なら誰にも負けないんじゃないですかね？」

「『袴の王様』、あつ！！」

思い出した。上裸で暴れまわる袴を履いた裸の王様。

「去年の『二ンキ王国決戦』の優勝者の一！」

「やっぱり、有名ですかねえ」

「心頭滅却すれば火もまた涼し！ 涼し！」

火達磨になつた『袴の王様』が叫ぶ。

「なつ！」

私と『放火魔ん』は驚愕する。

火達磨になつたはずの『袴の王様』は『涼し』の一言で火を振り払い平然と無傷で立つている。

「歯、食い縛れ！！」

王様は拳を構え。放火魔はガードしようと構えた。

ただ。次の瞬間『放火魔ん』は星となつた。目にも留まらぬ高速の拳を真正面からガードすることも出来る訳なく打ち込まれたのだ。『ヒヤッハ——！ プレイヤーキラーぞまあ——！』

『放火魔ん』散々である。

「あの、本当にありがとうございました」

「うん、あの後、私は家に一人を招きいれた。

「いえ、いえ、気にしなくていいですよ」

「ああ、全然気にすることねえぜ」

とりあえず、ホットケーキを『』馳走した。

「おお、うめえ」

「そうですねえ、おいしいですねえ」

『袴の王様』さんはがさつだけど結構いい人だ。あっちから話掛けしてくれるし。言葉づかいは汚くて上裸で田のやり場に困るけど、基本ストレートな人で接しやすい人だ。

『隠れ鬼』さんは、よくわからない。基本いつも一ゴー一ゴーしていて。その表情を常に保っている。ある意味ポーカフェイス。『氣さく』な感じに接してくれるけど。内心はどうなんだろうか？

「そういえば、王様さんは格闘家なんですか？」

武器を持つているように見えないし。正拳突きだつたし。王様さん困ったように、鬼さんは面白そうに顔合わせる。「格闘家って言われてもなあ？」

「そうですねえ」

確かに炎を振り払うなんて格闘家にはできそうに無いけど。振り分け画面見せたら早いんじゃないですか？」

鬼さんは王様さんに進言する。

「まあ、そうだな」

王様さんは少し操作したあと、振り分け画面を渡していく。「拝見させてもらいますね」

「おう」

人の振り分け画面を見るのは初めてだ、若干緊張する。

『気合い』 1000、……？

「え？」

『『氣合い』ってなんだ？　『氣合い』全フリツビツコツヒー.

?　鬼さんの方を見るが二口一口している。

「え、『氣合い』ってなんですか？」

王様さんに尋ねてみる。『氣合い』なんてスキル初めて聞いた。

「うん、わからん！」

王様さん！?

鬼さんの方を見る。

「まあ、何でしょ、『氣合い』があれば何でも出来る！　みたな感じですかねえ？」

「なんでも出来るってどうこいつことですか？」

「どういうことって言われても。なあ？」

「そうですねえ」

ここで鬼さんが一息つき。言葉を続ける。

「まあ、戦闘に関することならほとんどの何でも出来ますねえ、まあ、『氣合い』は戦闘系スキルなので」

「だから、その何でもって言つのは……」

「さつき見たいに音速を超える正拳突きを繰り出したり、大魔導師並みのメテオを打ち出したり、打ち返したり。瀕死から全快まで回復したりもう色々ですね」

「なつ！　最強じゃないですか！？」

そんなことできれば『氣合い』なんていうのがマイナースキルな訳がない。

「最強といつても実質『防御』のスキルにポイント振つてる訳じゃないですし、『隠密』とか『暗殺』とかのスキルで不意打ちされたら、ほぼ即死です。それに、このスキル全フリでもしなきや、全然使えないスキルですしねえ、まあ、マイナーって言つより知ってる人もそこそこのけど、そこに全フリするほど馬鹿じゃないってどこかなあ？」

成る程、私はいらない。

「散々、こつてくれるなあ『隠れ鬼』さんよお」

「あはは、怒らないでトさいよ王様」

「それにしても『氣合い』全フリって、『調理』とか『調合』とか  
『鍊金』とか何にも出来ないってことですよね  
ですねえ、それですねえ『アカネ』さん」

「はい?」

「具体的には言えないんですけど、私のポイント割り振りもそんな  
感じなんですよねえ」

「偏ってるって事ですか」

「そうです」

「『アカネ』さん、僕らと一緒にパーティ、組みませんか?」

王様さんは黙つてこちらを見ている。

「いや、でもレベルとかも低いと思いまーし、その足引っ張るとい  
うか、付いていけないと思いまーし」

「レベルなんて関係ねーよ」

「やつですよ、レベルなんてちょっと努力すればすぐ伸びますか

「うー」

はあ、『袴の王様』さんはともかく『隠れ鬼』さんは、わざとか。

レベルとかじやなくて、あなた達のトーンショングに付いていける気  
がしないんです。

(後書き)

アクションが書きたくて、書いたなんですが……あれ?

一部『TTRPGをプレイしよう。』と並べ、わたくし著の短編から設定を流用しています。

クロスオーバーなどはしませんがそちらも読んでみると理解が深まるかもしれません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8482z/>

---

オンラインゲーム『ジ・ユード・タカイ・オンライン』 隠れ鬼と袴の王様

2011年12月26日21時59分発行